
とある世界の幻想書庫

i& r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の幻想書庫

【Zコード】

Z8945Y

【作者名】

i&r

【あらすじ】

ある日突然死んでしまった青年。その原因は神のミスというなんともテンプレ的な展開で一つ返事でとあるの世界に転生する事に。新たな世界で彼は一体何をするのか！？

原作ブレイクやクロスオーバーが苦手という方は見るのを遠慮するのがいいかも？

プロローグ（前書き）

どうも初めまして 読者の皆様。 作者の? & ハーで御座います。
原作やアニメを見ていたらつい書きたくなつて書いてしまいました。

処女作ですので暖かい田で見守つて下さー。

それではどうぞー！

プロローグ

田を覚ますとそこは何も無い真っ白な空間だった。

「…………知らない天・J・Y・空間だ」

こういった場面のお約束みたいなセリフを言ってみた。因みに言い直したのは立っているのか浮いているのかも判らない曖昧な状態だから。

「何でこんなトコに居んだる?」

記憶の糸を辿つてみると……

（回想スタート）

その日俺は何処にでもある様なマンションの一室で本を読んでいた。

「…………眠イ」

幾ら暇だからってこれだけの量の本を一気に読み返すのは流石に無茶だったか?と田の前のテーブルに積んだ読み終えた本の山を見る。ファンタジーだったり学園物だったり元ネタがゲームだったりと様々であり、それ等全てを含めた総数は約200冊で半数以上がラノベ。

それらを一気に読めは如何なるか……

「酷工顔だな」

鏡を見て咳く。

目の下には『それってメイク?』とツツ コミが入りかねない程の隈
が出来ており、髪もボサボサでちらほらと枝毛が目立つほどに荒れ
ている。

「流石に五徹はやり過ぎた……寝よ」

フフフフとベットに向かいそのまま倒れ込む。

(あつそういや今日つて新刊の発売日じゃん一起きたら買ひに行かな
い……とい)

そう思いながら意識が薄れて行き、直ぐにいびきを掻いて眠りだし
た。

（回想終わり）

そうだー俺、五徹して本読んでそのまま寝たんだった。……って事
は、ここは夢の世界か。そうと判れば……

「寝る」

「寝るなー。」（ダコニッ）（…）

いきなり背後から誰かに頭を殴られた。振り返るとそこには真っ白な翼を持つ金髪の女性が一棘付きバット（Hス○リ○ルグ）を肩に担いで立っていた。色々と訊きたい事はあるがまずはこれだろ。

「…えっと、まさかその撲殺バットで俺の頭を殴ったのか？」

「そりゃ、私は流血沙汰は嫌いだから中は空洞のゴム製で表面にメタリックの塗装なんだけれどね」

「ちやんと説明するわ。少し腰へなるわよ
やなにって事？」

「夢じやないって…俺、五徹明けでそのまま寝たはずなんだけど夢

「ちやんと説明するわ。少し腰へなるわよ

別に構わない」と答えると淡々と話し始めめる。

説明は一時間ほどで終わった。

「つまり今の話を要約すると貴女は天使で上司の神が書類整理中にお茶を零し、俺の書類の寿命の欄を滲ませ読みなくなりそれによつて俺は死んでしまつた。そして貴女はただでさえ仕事が山積みなのに余計な仕事を増やしてくれた神をタコ殴りにしてこの事の処理に來た、とそれで間違ひ無いですか？」

「ええ間違ひ無いわ

そつか俺、死んじまつたのか。

「死んでしまつたと言うのに随分落ち着いてるわね。普通の人間なら泣き叫んで取り乱したりするのだけど」

「まあ自分の思つまま自由に生きてたから後悔はしていない。で、俺は天国と地獄どっちに送られるん?」

父さん母さん、先立てs…先立つた不幸をお許し下s「どちらでも無いわ」…つえ?

「本来、天界の書類に書かれた寿命が尽きる前に死ぬのは余程の極悪人を除いて存在し得ないわ。そこには一切の例外も存在しない、故に貴方を天国にも地獄にも送る事が出来ない。かと言つて元の世界に戻すのも世界が崩壊してしまつから不可能、となると嫌でも別の世界に転生して貰うしかないのよ。此方の過失だから貴方の望みは出来るだけ叶えるわ」

「それはまたテンプレな展開。別に生き返れるのなら別の世界でも良いんだけどその望みつてのはどんな物でも良いん?つてか読心術使つた?」

「天界に住む者は殆どが使えるわ。あと責任を取るのは上司だから別に良いわよ」

「…」「りと笑顔で答える天使さん。だが目のハイライトが消えていくちょっと怖い。

「じゃあまずは転生する世界はとある魔術の世界。次に身体能力の上限を無くして鍛えれば鍛えるだけ強くなるよ。あと体質で完全記憶能力と能力は自身の記憶している情報を具現化する能力で宜しく」

「ちゅうと待ちなさい…………」の内容ならあと三つまで追加可能だけじりつかぬ？」

これでもかなりチートにした積もりなんだけど……まあついでだ。

「それなら世界中のあつとあらゆる言語を日本語と同じ様に読み書き話せる様になるのときゅーきゅーキコードにて来た混沌とした実在を自分の意志でON/OFFが可能にするのとジャック・ラカン+川神百代分の氣をGNドライブ方式で欲しい」

流石に無理が有るかな？

「問題ないと最初に言つた筈よ。さて、向こうに着けば全て貴方の言つた通りになつているから第一の人生をしつかり生きなさい。ただ一つ、混沌とした実在を使つてはそれに打ち消されて他の能力や氣を使えないから注意しなさい…………ああ、言い忘れてたけど送るのはとあるの世界に限り無く近い世界だから貴方も知らないイレギュラーが起こる可能」「俺といつイレギュラーが入るんだからその位は想定範囲内ですよ」そう、では最後に一言」

コホン、と咳払いをする天使さん。

「御免なさい……」

いきなり深く頭を下げ謝罪の言葉を口にする天使。

何故？

そう思つたがその疑問は直ぐに解決した。立つてはいるという感覚が

消えて足元に黒い穴がポツカリと開いていたからだ。

吸い込まれる様に落ちて行き次第に声も聞こえなくなる。その穴を
天使が見つめていると……

「行つたかの？」

背後に音も無く杖をついた爺さんが現れた。

「はい、たつた今送った所です。しかし宣しかつたのですか？彼に本当の事を伝えなくて」

「ミカエルよ、あれだけの陳情を一気に処理するにはうつてつけだつたんじやよ。それに知つてしまえば芝居臭くなつてしまうしの」

「私は仕事が効率的に進むのならそれで構いませんがこの件に関し

ての今後の処理は全てキッチリとやって下さいよ、ゼウス様

「分かつてある。元はと言えばワシが気紛れに言つた一言から始まつたことじゅからな。それよりも配信準備を始めるから執務室へ行くぞ」

そういうとゼウスとミカエルは霞の様に消えていく。

完全に姿が消える直前、ミカエルは穴を見つめてこう呟いた。

（我、大天使ミカエルの名において汝、の第一の人生が幸
多きものであらん事を切に願う

プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字・脱字・感想などがあればどうぞ。

第1話 ギャグパート？いいえ、修行です（前書き）

早速次の投稿です。

それではどうぞ！

第1話 ギャグパート？いいえ、修行です

俺が無事に転生してから早5年の月日が流れた……え？ いきなり端折り過ぎだつて？ 良い思い出が殆ど無いから話しても仕方ないよ。

「さて奏志よ、お前も五歳になつた事だしそろそろ修行を始めても良い頃かの」

ああ、言い忘れていた。俺の今の名前は鉄奏志(くろがねそうし)、鉄家の長男だ。因みに今話し掛けってきたのは祖父で名前は鉄陣内。両親はいない……というよりも知らない。転生して最初に気がついた時には爺様に抱かれており両親の顔を一度も見た事が無いからだ。

その理由を爺様に幾ら尋ねても、「いずれ時が来れば話す」としか答えて貰えず、その時の爺様の表情を見た俺はそれ以来、その話題を封印して爺様の言つときが来るのを待つ事にした。

それはそつと、鉄陣内

その名前を聞いた時、最初はつよきすの世界なのか！？とも思ったが直ぐに違うと判明した。地図を見るとシックカリと学園都市が存在していたからだ。だが鉄陣内の強さや性格は例え世界が違えども違わないらしい。なぜなら・・・・・・

「じじ様、修行の内容は？」

そう訊けば

「なうに奏志はまだ身体も出来上がっておらんからあまり無茶な事

はせんよ。わじが毎年おじやましとる龍穴へ連れて行つて氣の効率的な扱い方や何やらを教えるだけじゃよ」（がしつつ）

と答え俺を脇に抱えるのだ。

俺は嫌な予感しかしながら、日本の龍穴ならまだしそれが海外に有り、この陣内がつよきすの陣内と同じ性格、強さを持っているなら移動手段はたつた一つ。

「えつとじじ様、その場所つて日本国内だよね？」

「ヒツツ！」

「無視ですか！」

「どうでもよいが黙つとうんと舌あ齒むさい。では行くぞー・まずは

富士の樹海ーー！」

「ゴシ！ーーー（加速）

「グロシー！」

いきなりの急加速に俺の視界はブラックアウトしていった。

「何じやこれしきの加速で氣を失いおつて、こうなつたらことん鍛える必要があるわいわい。国内の靈泉だけの予定じゅつたが世界48箇所龍穴巡りも追加じやーー！」

意識を失う直前にそんな声が聴こえた。

……マジでか！？

「ここからはずくななり過ぎるので一部のみお伝えします。」（ｐｙ作者）

「富士の樹海」

「ほれ着いたぞ、せつせと田を覚まさるかい！…」（ポイツ）

ドボンッ！！

「……ちべてええええええ！」

何だこの水メチャクチャ冷たい！ってか何で俺、こんな水ん中にいるんだ？

「じじじじじ爺様ままままま。いいいいいいいたたたたいいななななにににを！…！」

「起きたか奏志よ。富士の麓のこの靈泉で泳ぎ、日本中の地精の力を感じられる様になるんじゃ！ただし水の温度は-18度じゃから5分以内に感じられんと凍死だぞ」

「普通氷になるよねえ……」

「南米アマゾンの何処か～

「わああの體の背中でワサビを摩つ下ろして来るんじゃ

「靈泉関係無いじゃん……」

「関係あつまくつじや！此処も靈泉の一ツドケヒに住む鰐の體で摩り下ろしたワサビは最高の味になるんじゃい、さあ逝けい……」

「字が違あああう……！」

（スペインの闘牛場）

「今日は靈泉は関係無いがどの位出来る様になつたのか確かめるとするかの」

「爺様、田隠しに手錠と足枷したこの状態で何をするんですか？」

「な～に簡単な事じや。その状態でバイソンと闘牛をして5分間逃げ切るか勝てば良いんじゃよ」

「それって俺みたいな子どもがせる事じやないよねえ……」

以上が修行内容の極一部です。

5年後…………時間の経過は気にならないで下さい。色々とあったんですね、色々とね…………

「奏志よ、お前ももう10歳になり氣の扱いもワシを除いて鉄一族歴代最高位になった事じやしそうそろ龍穴巡り以外の事もしようかの」

「それはそうと爺様、昨日蔵の掃除をしてたら隠し扉見つけたさ。

中に入つて一番奥まで行つたら何か異様な雰囲気の脇差が出て來た
んだけどこれつて何なの？」

袋に包んだ脇差を爺様の前に出すと何時もケラケラとした爺様の目
つきが変わつた。

「奏志、あの扉を通る事が出来たのかー？」

「うんやうだけど？」

「あそこにはわしが氣で封印しておつた箒なんじやがのぉ」

爺様は指で髪を撫でながらそう答えた。

如何なる力であつてもある方法を除けば混沌カオティック・コアルとした実在の前では無
意味に等しい。最も、爺様ならそれをしなくても貫通しそうだけど。
(笑)

「……ふう、いつかは教えるつもりじゃったから丁度良いか。奏志、
よく聴くのじや」

改めて鋭い視線を送つて来る爺様。そこには祖父としての陣内では
なく武術の師匠としての陣内がいた。

俺も改めて正座し直す。

「……この脇差は100年前にわしが世界48箇所の靈泉でわしの
氣と各地の力を混ぜ合わせ出来上がつた工ネルギーを込めながら鍛
え上げた対の刀の片割れでの」

「100年前つて爺様いつたい歳幾つなの？」

「でじや、出来上がった刀を試しに軽く振るつてみたら海が2～30キロ程割れての、危険過ぎるんで蔵の隠し扉の奥に仕舞い込み、コイツのある場所の扉には全盛期の頃のわしが氣で封印を掛け刀も幻術で見えなくした」

「ごめん爺様、俺の目にはバツチリ見えました。

「そして何時の日かその双方の術を突破した者に刀を託す事に決めたんじや。奏志よーこれからは剣術の鍛練に重点を置くから覚悟するのじやぞ」

「覚悟？ そんなもの……」

「覚悟なんてもしなくてもやる事は変わらないんですから今更ですよ爺様」

「かあーっカツカツカツカ。確かに違いないわい」

「あつー何時もの爺様に戻った。

「で爺様、さつきは聞き流してたけど対になつてるもう一方の刀は何処にあるの？」

「対の刀として鍛え試し斬りをした時点で封印したのなりも「片方もある筈だ」が蔵の中になつたのはこれ一本のみ。

「もう片方はわしの友人に預けてあつたんじやが今はそいつの孫が持つておる。縁があればその内会えるじゃらうから今は修行に専念

する事じやの」

「分かりました爺様、一日でも早く」の刀を自らの手足の如く振るえる様頑張ります……」

「つむごの意氣じや奏志よ。ではまず剣術の基礎知識として地下にある蔵書を全て読むのじや……」

「はー……。つてええー?あの扉を開けて直ぐに本の壁になつてゐる部屋の中の本を全部……?」

「そりじゃ。読み終えねば剣術は教へんから教えて欲しければ早く読み終える」とじやの」

セツヒテ爺様は俺に一つのボタンを持たせた。

「わしは今から旅行に行くんで暫くは連絡がつかん。読み終えたら氣を込めながらそのボタンを押すんじや」

とうひつ……

と、空高く飛び上がり爺様は何処かに行ってしまった。

「…………」

ひゅうううううううと奏志しかい庭を風が吹き抜ける。

「……まずは本の整理からか、はあ~」

溜め息をつきながらも階段を下りて爺様の集めた本が置いてある保

管室へと向かう。

「そういうや何だかんだでここに入るのは初めてだな」

筋様が趣味で蒐集した本、一体何冊あるのやら。

「下手な図書館の蔵書量より多かつたらどうしよ……つてそんな訳無いか」

そう呴きながら扉を開けると以前と同じく本の山が出迎えてくれた。

一先ず運ひ出すか

どんな分類になつてゐるのかも不明なので手前にある本から手当たり次第に運び出す。

あほお～あほお～あほお～
あほお～あほお～あほお～

空が赤く染まりカラスの鳴き声が聽こえる。

「一日中運び出してまだ全部じゃないってマジで何年あるんだ
だ。」

「もう少し運び出しても本の壁が終わらない…軽くノイローゼになっちゃう
だ。」

「今日はこれ位にして運び出したの読むか」

一階に上がり運び出した本を見る。見える部分だけで見積もつても
軽く500冊以上あるな、しかも全部ハードカバーのハリポタサイ
ズで…

「「いや 普通に読んでたらこれだけで一月は掛かるな……」

いや読書 자체は前からの趣味だから苦じやないんだけれどね、流石に量が量だから普通に読んでたら原作に間に合つ気がしないんだよね」と。

「氣で身体強化して読むか」

意識を集中して氣を練り上げる。別に意識しなくとも可能なのだがそうするとぶつちやけ燃費が物凄く悪い。どの位違うかと言えば同じ量の氣での持続時間がF1カーと低燃費車の差位はある。最もGノードライブ方式の俺にとっては些細な事なのだがマラソンをクラウチングスタートで走り出す人物が皆無な様に何か気分的に嫌なのだ。

とまあそんな話はさて置いて練り上げた氣を身体中に流して強化し、その上で更に目を強化する。

「よし強化完了。」の状態でなら2~3日で読み切れる

最も近くにある本を手に取る。タイトルは・・・・・

「えへ何々、時空管理局執務官資格試験過去問集・・・・・」

俺は本を開いて問題を解きながら黙々と読み進める。

タイトルに突っ込まないのか?そんな事、爺様と5年も一緒に修行してたら悟ったよ、『爺様のする事は考えるだけ無駄』ってね。

「はい終了。それで答え合わせつと」

本に備え付けられた回答と照らし合わせる。結果は……

「ギリギリ合格ラインか……まつ 結果は如何でもいいしぬぎ行こ」

過去問集を閉じ次の本に手を伸ばす・・・・・・・・

2日後

「…………ん～～～～」それで最後つと

持ち出した最後の本を読み終えた泰志は身体を軽く伸ばす。

バキバキっと全身から音が鳴る。

「しつかし、まさかこれだけ読んで剣術はおろか武術に関する本がゼロとは……」

明らかにネタと言える本も最初の過去問集だけだったしその他の世界各国の地理や歴史書、政治に経済とジャンルだけは豊富だった。

「爺様、学校の先生にでもなろうとしてたのかな？」

本を部屋の隅に積み上げながら呟く。爺様が教師・・・・・あれ？一瞬、魔法使いの集まる学園都市の長のポストにいる姿が見えた。

「……まつ、そんな如何でもいい事に費やす時間が勿体無いしぬぎ行こ」

保管室へ新たな本を取りに向かつ。

第1話 ギャグパート？いいえ、修行です（後書き）

お読み頂き有難う御座ります。

色々と省略しまくつてますがそれは徐々に明らかになって行く予定
なので気にしないで下さご。

誤字・脱字・感想・疑問などありましたらどうぞ。

それではまた次回お逢いしましょ～

第2話 ギャグパート? はい、そしてカオスな予感です（前書き）

気付いてみれば5000字オーバー。長いのかな?

それではどうぞ

第2話 ギャグパート?はい、そしてカオスな予感です

奏志が本を読み漁りだしてから早3ヶ月。

読み終えた本は既に三万冊を突破し漸く部屋の端に辿り着いた。

「3ヶ月でやつと4分の1位が終了か。強化にも慣れてきたしこれならあと半年位で読み終わる」

ぶつかやけると睡眠時間を今までの半分にすればもつと早く読み終わるのだが以前と同じ過ちは犯したくないのでやらない。

「さて次の本のタイトルは……」

本の山を崩さないよう慎重に引き抜いていく。

最初の方は規則正しく

本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本

といった感じで積み上がっていたのだが途中から

本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本
本 本 本 本 本 本

見たいな感じで不規則に積み重なつていいので下手に引き抜けば連鎖的に崩れ出して大変な事になるのだ。

と、話が若干ズレたので戻すとしそう。

崩さないように引き抜いた本のタイトルは・・・・・

IS基礎理論

まさか！？と思いつき著者の欄を確認するとイニシャルのみが記載されていた。

著者：J・S&T・S

提供：時空管理局＆IS学園

「ふーん成る程……って著者名隠しても提供部分明記してたら意味無いだろ？が！…」

思わず突っ込んでしまった。

多分あの一人で間違い無いだろうがマッドサイエンティスト同士が次元世界はおろか作品の壁すら越えて共同で執筆したであろう本……どんなカオスな内容なのか楽しみだ

期待に胸を膨らませながら本を開く。その内容は皆様の想像にお任せしますが……著者が著者なだけに凄かつたとだけ言っておく。

「さて次のタイトルは……」

IS基礎理論を読み終えて早3日。あれ以降まともな本が皆無となりネタとしか思えない本やこの世界に存在するとかなり危ない本などを次々と読破していきそれ等を読破済みの本の山に置きながら手

探しで次の本を掴み……取れなかつた。

「……えつー?」

顔を向けてあらビックリ、先程まであつた箒の本の壁が無く壁が見えており、足元を見れば床は無く更に地下へと続く階段があつた。

「まだ地下があるんかい！つて今更驚く事でもないか……にしてもなんか不思議な感覚だな」

危険な香りがしたかと思えば安心出来る香りがしたり、「ゴツゴツ」とした硬い感じがしたかと思えばフワフワとした柔らかい感じになつていたりと何がなんだか訳が分からぬ感じだつた。

「確かめた方が良いよな、面倒臭いけど……」

そう呟いて奏志は階段を下りて行く。

たとえ途中から光が届かず視界が通常なら限り無くゼロに近くなろうとも毒蛇毒虫が大量発生していようとも無視してどんどん下りて行く。

最初の方こそ噛み付こうとしたり針で刺さうとするのが居たが軽く威嚇しただけで襲つて来なくなつた。

そんなこんなを続けながら一時間ほど下り続け「いい加減そろそろ帰りが面倒臭くなるな」となどと考え出した時、漸く最下層に到着した。

階段地獄から開放され、暫く廊下を進むと淡い光と共にダイヤル付きの金属製の扉、要するに金庫が現れた。

「何故にこんな所に金庫？それもかなり古い……」

ダイヤルやドアノブは錆び付きその周囲も長年放置されていた為か
薦や苔で覆われてしまっている。

試しにダイヤルを回してみよとしたが予想通りミリたりとも動
かなかつた。

「やっぱ動かないか。いつそ殴つて壊すか能力使って焼き切……何
だ、これ？」

扉に何かが刻み込まれているのを発見した。錆び付いていて読み難
いが表面を軽く払つとある程度読み易くなつた。

“かあーっカツカツカツカーー”の扉を殴つて壊そうとしても簡単に
はいかんぞい。あと扉の中にTNTを100トンほど詰め込んだる
から火器は使わん方がええぞ。健闘を祈る”

100トンつて……

「……仕込み過ぎだ……！」

幾ら地下深くにあるとはいえそれだけの爆薬が一度に爆発すれば被
害が出ない筈が無い。付け加えるなら保管室からこの扉まで隔壁などという物は存在しなかつた……つまりは地上まで繋がっている状
態なのである。

そんな状況で爆発すればほぼ確実に鉄家を中心とした幾らかの範囲
が陥没する。

「火器は論外、殴つて壊すのも衝撃で爆発する可能性があるから駄目……となるとやっぱこの方法が一番かな」

そう言つて奏志は扉から30mほど離れて右手を扉に向け腰を落として構えを取り意識を集中する。

「……………イマジンパンク幻想書庫、アクセス。使用コード……アソシリュート・ゼロ絶対零度砲……」

火器も衝撃も駄目ならば衝撃を与えずに凍らせるのみ！！

言葉を紡ぐと右手前方に青白い光の弾が出現しドンドン肥大していく。

「対象設定……前方金庫扉及び扉内部爆発物に限定……収束」

直径50cm程まで肥大した光弾は見る見るうちに小さくなり野球ボール程になる。

「構築完了……ファイヤ発射ア！」

光弾は一瞬で亞音速まで加速し扉に着弾し見る見るうちに凍り付いていく。

「さてと、後は軽く振動を加えれば……ふんっ……！」

震脚を叩き込むと扉に亀裂が入りそこから砂のように崩れ落ちた。

壊れた扉の先には更に通路が続いており、その奥に今度は木製の扉があつた。

「セーーーて中に何があんだろ?」

凍結させた爆薬の処理は一先ず後回しにして通路を進み扉を開ける。そこは上の保管室の様な大雑把なものでなく、保管物一つ一つがキチンと棚に納められていた。

「……本当に爺様は一体どうからこんなモン調達して来るんだ?」

納められていくブツを見てそう言わずにはいられなかつた。

何せ、そこにあるのは某青い槍兵が持つ槍だつたり、時の番人の?/?/?がもつオリハルコン製の武器だつたり、青い菱形の宝石とか赤い宝石の様な超高エネルギー結晶体だつたり、機械的な兔耳の力チューシャだつたり、螺旋模様の楯と突撃槍だつたり、三国最強の乙女武将が使う戟だつたり、竜鳴館学園風紀委員長に代々受け継がれる日本刀だつたり、最終幻想13の雷光さんの初期装備だつたり、某野菜先生の物語に登場する魔法球だつたり、炎髪灼眼の討ち手が身に纏うコートだつたり、その他にも色々……

「分類したら魔術寄りのが大半……しかもロストロギアまで紛れてくれるというオマケ付き」

青い方は21個全部有るし赤い方も結構数が多い。暴走したら軽く地球が滅びるんですけど!?

心の中でそう叫んでいると棚から一枚の折り畳まれた紙が風の流れに乗つてこちらに飛んで来た。
それをキャッチして開くと……

「これらは奏志の完全制御下に置ける様に弄つてあるから心配無用じや
」

b
y陣内

「
」

とだけ短く書かれていた。それを見た奏志は……

「突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ突っ込んじや駄目だ！」

ツッコミを入れないよう自己暗示を掛けていた。

無理も無い。ロストロギアは管理自体は管理局でも可能だが性質を弄つたりするとなると出来る人物は限られる。思い当たるのはス力さんかロストロギアの製作者位なのだがそれはそれ、鉄陣内が規格外という一言で納得出来るのではないだろうか？

「あつ、復活したんでもう大丈夫ですよ」

「そりゃならまた後書きででも逢おうや。」

「はい……つてあれ？俺は一体誰に返事してたんだろう？電波的なモ

ンでも受信してたのかな?「

まーそんなトコじやね?

「あれ、また電波が……って考えても仕方ない。一先ずはコイツ等を何とかしないと」

武器は夜笠に入れとくとしてジュエルシードとレーヴィックは別荘に保管場所作るしかないな。

「となると先ずは別荘の調査からか……見た目はエヴァンジエリンのとソックリ、でも爺様の所有物が既製品な筈ないんだよな~」

武器などを夜笠に仕舞い込んで身に纏い溜め息をつきながら別荘唯一の建造物がある場所へと入つて行く。

（別荘内、レーベンスシュルト城？）

世界三大瀑布クラスの滝のど真ん中に造られた城から伸びる橋の先ある塔の上に奏志は降り立つた。

「・・・これオリジナルと大分違うな」

確かに城の外観はオリジナルとほぼ同じ……しかし今居る場所から城までは原作は500m位だが

「1キロ以上ある上に城全体を囲む様にやたらと高い城壁があるし更に城は原作より遙かに大きい。しかも何かデカイのが一体、門番の如く両脇に控えてるし……」

城壁が300m位で第8ジオトープじゃあるまいしどか門番がやらうとデカイとかそんな事はこの際どうでもいい。こいつ等みたいに他のエリアにも生物は居るだろうしゲートから迷い込んで城を荒らそうとするのも居るかもしないから荒らさない様に門番が居ても不思議は無い。問題なのは……

「龍樹や^{コヨウツウメシンスカナ}両面宿讐^{リョウモンスッショウ}はやり過ぎでしょ（汗）」

スクナは京都で封印されてんじゃないのか！？龍樹も帝都の守護は如何した！？

「グオオオオオオオオ！…」
「シギヤアアアアアア…！」

俺の声に反応したのか龍樹とスクナが吼える。

「えつ？スクナは爺様に此処の守護獣になる事を条件に封印を解かれて龍樹の方は爺様とケンカしてゐに意気投合して跡継ぎも丁度いい感じに成長したから引退して此処の守護聖獣に転職したあ！！？」

「？」

突っ込み処が満載過ぎるぞ！

というかそもそも爺様はどうやってネギまの世界に行つたんだ？此処には麻帆良学園都市も無いし京都に行つた時も何も無かつた筈なんだけど……

『そういうえば奏志殿。陣内様に逢つ時はいつも横にもう一人御老人が居りました』

龍樹の言葉が頭の中に響く。端から見ればただ吼えている様にしか見えないが奏志は特典の『世界中のありとあらゆる言語を日本語と同じ様に読み書き話せる様になる』で聴き取れているのだ。

と言つても動物相手だとその対象が高い知能を有している事が条件になる。今までに会話出来たのは犬・猫・チンパンジー・イルカ・鯨と後は鷹・鶲・梟といった猛禽類のみで蛇や蛙、その他多くの昆虫などとは会話が出来ない。その点、龍樹やスクナは全く大丈夫なので今後の奏志との会話は全て日本語になります。

「…まさかとは思つけどその老人つて宝石剣持つてたりする？」

もし当たつているなら此処に有るもの全ての説明がつくるのだが出来れば外れて欲しいな。

奏志はそう思つた……だがしかし…こういう場においては外れて欲しい予想こそ当たつてしまふものなのである。

『ええ、持つていきましたよ』

やつぱし。rn

『じゃが我等が此方に来てからは一度逢つておらんし陣内様も外の時間で10年程は逢つて無いそうじゃぞ』

10年……俺が産まれて直ぐの頃からか。何か関係があるのか?

「居ないのならそれで良いや。居ても面倒事が増えるだけだし」

爺様一人でも大変なのにこれ以上カオスな状況は想像すらしたくないわ!!

「それで早速なんだけどこの城ん中に書物つてある~爺様に剣術を教えて貰う事になつたんだけどその基礎に保管室内の本全部読めつて言われてさ~。一応、ココも保管室の中に入るんだよね~」

『そういう事でしたか。それならば城の中に案内を……と申し上げたいのですがこの城門を開ける訳にはいきません』

「どして?」

『それは“奏志が来たら最初の一回は城門を開けず自力で中に入らせよ”と陣内様に言われてあるからじゃ』

あ~成る程、これも修行の一環なのね。

「門を開けず自力で中には入るんだつたらどんな手段使つてもいいのか?」

『城が崩壊しない程度でしたら』

俺が何をするか察したのか龍樹は条件付きで許可を出してきた。

「門を開けずにつてのが面倒なんだよな～」

上を越えるか空間移動するか破壊するか位しか思いつかない。だが
……

「こんな壁登んの面倒臭いし空間移動は何か気分的に使いたくない
……よし壊そう」

門の直ぐ横の壁まで移動してコンコンッ！と軽く叩く。

「（厚さは5ミリとか）あつー訊き忘れてたけど中に誰か居たりする？」

『いや、中は無人じやぞ』

それを聞いて安心したよ。わざとビリヤッて壊そうかな あれも良
いしあれも捨て難い、けどやつぱり

「外から壊すより中の方が簡単だよな……爆発の威力を調節し
てつとー！」

腕を中心に氣を纏わせる。

「ウォール……バスター！……」

奏志の拳が城壁に突き刺さった。

第2話 ギャグパート?はい、そしてカオスな予感です（後書き）

奏志「おーい、約束通り逢いに来たぞー」

作者「よく來たな」

奏志「まあな、つーか終盤の方、何考えて書いたんだ?」

作者「深く考えずに書いてみたらこうなった」

奏志「考えず……ってまあいいか。それでこれから如何するよ?」

作者「本当は読者の皆様からの質問なんかに答えたりする「一ナード」というかと思つてたんだけど……」

奏志「肝心の質問がまだ来ないと」

作者「そつなんだ。だから今日はこれでお開きかなあ」

奏志「なら最後にあれやんないとな」

作者「解つてゐる、セーの」

奏志・作者「この小説を読んで頂いている読者の皆様、有難う御座います。それではまた次回でお逢いしましょ?」「うわー」

作者「誤字・脱字・感想・質問など御座いましたらどうぞ」

奏志「そういう事は先に言つとけよ」

第3話 ギャグパート?はい、そして予感的中です（前書き）

作者「ちょっとカオスにし過ぎたかも？」

奏志「何で疑惑形なんだよ」

作者「カオス過ぎとそういうのとの基準がいまいち判らないから。
それと相談があるんだが」

奏志「それは後書きでな。ではどうやー。」

作者「……それ、俺のセリフ」

第3話 ギャグパート?はい、そして予感的中です

「ウォール……バスターアアア……！」

拳を壁に叩き付ける……が壁は壊れる処か亀裂の一本すら入らない。

『如何したのです秦志殿？技は不発に終わったのですか？』

龍樹が問い合わせてくる。

「いや、ちゃんと発動したぞ」

その言葉と共に時間差で拳の接触部分から蜘蛛の巣状に縦横無尽に亀裂が入り風船が割れるかの如く弾け土煙が舞う。

「ウォールバスター……凝縮した氣を打ち込み内部で爆発させる事で標的を内側から破壊する技だ。爆発には指向性を持たせる事が出来るからこんな風に使用者に破片が飛ばない様にしたりも出来る」

煙が晴れると奏志の正面部分は亀裂こそ入ったものの原形を留めており、その周囲のみが粉々に砕けていた。

使う度に破片の散弾を喰らうのは嫌だからな。

「まつ、それはさて置いて……おつじゅま～」

軽い足取りで中へと入って行く。

トンネルを通り過ぎるとそこにはメインの城以外にも石造りの家や

工房、中華風の小さな城からコンクリートのビルまで古今東西のあらゆる建物があった。

「……この光景を見て何も感じない自分が怖い」

慣れって恐ろしいよね（笑）

「あつー忘れてた。おーい龍樹にスクナあ」

『如何しましたか奏志様？』

「聞き忘れてたんだけど魔法球の中と外の時間経過の差と体の老化を抑えるアイテムが有るかどうか教えて欲しいんだけど知ってる？」

『時間経過は中での2日が外での1時間じゃ。老化を抑えるアイテムは最上階にある宝物庫にあります』

「うげえ！？ よりにもよって一番上かよ。この城、グルメタワー並みの高さがあるから1200mってトコか？」

「面倒臭いけどまあいいや。ありがとうございます」

軽くお礼を言つて城に入る。

～～城内～～

中に入った奏志をまず出迎えたのは広いエントランスホール……と此方に機銃を向けたオートマトンの群れだった。

「今度はダブルオー…… キルモードになつてないと有り難いけど今までの経験からすると期待するだけ無駄だろ?」

その予想は当たりオートマトン全機が一斉に機銃を撃つてきた。

「あぶねつとー！」

開け放たれたままの扉に飛び移つて初弾を回避し、夜笠から地獄蝶々取り出して抜刀の体制をとる。

「一気に終わらせる！万物、悉く切り刻め……」

練り上げた氣を全身に行き渡らせ……

「地獄蝶々ーー！」

一気にオートマトンの群れに突つ込みそのまま通り抜けた。オートマトンは奏志の速さに反応が追いつかないまでも軌道予測で奏志の位置を割り出しロックオンしようと機体を旋回せよつとしている。

「無駄だ。貴様らはもう壊れていのじんで」

チンッ！

地獄蝶々を鞘に納める音と同時にオートマトンは全機二等分になつて爆散した。

「居合い三枚下ろしつてな。しつかしまあこの様子じゃこの先も罷があると思つて動いた方がいいかな？」

そつ啖きながら階段を昇つていいく奏志だがその後は何事も無く最上階まで到達した。

「～最上階、宝物庫前～」

「・・・・・」

宝物庫を前にした奏志は呆れ果てた顔をしていた。何故ならば目の前にはある人物のホログラム映像が映し出されていたからだ。その人物とは……

「何で此処にティエリア・アーテがいるんだ?」

「気にするな。僕は気にしない」

「それキャラ違つくな?」

「気にするな。僕は気にしない」

あれ、無限ループ入った?

「いや、だからさ……」

「気にするな。でないと話が前に進まない」

あ、違った。

「なら氣にしない」とにする……でティエニアがホログラムで居るつて事はまさかヴォーダまで有つたりする？」

「その通りだ……あと先に言つておくが僕とヴォーダが此処に居るのは神をこの世界へ転生させた者達の仕業だ」

なぬ？それつてまさか……

「あの天使さんが？」

「そうだ。それともう一人、その天使の上司である神だ。詳しくはこのビデオレターを見ろ」

そう言つてティエニアは映像ファイルを再生した。

（～ファイル再生中～）

「このファイルを見ておるとこつ事は魔法球の中に居るこつ事じやな。初めまして、君をつっかりミスで殺してしまい部下にいたこ殴りこされた神（笑）です……つて何じゃそのカンペはー？」

「そんな事は如何でもいいですかから早くして下をこ一仕事が終わらなければ私が帰れないんですよーー！」

「…………解ったわい（給料下げちゃおつかな？）」「

神よ、そういう小言は止めてピンマイクのスイッチ切つてから言えよ。でないと……

「全部マイク拾つてますよ。私が肩代わりしている仕事分返しましょつか？」

「ほら、やつぱ聴こえた。

「すみませんでした。」

「下座しちゃったよ」の神（笑）。しかも立ってる状態から僅か0.001秒って早っ！？

「下座して頂かなくて結構なので早く収録終わらせて仕事して下さい」

映つてないけどこの声つてあの天使さんだよね？すんげー毒舌。

「……はい。コホン、という事で権限を部下に与えて君をその世界へ転生させた訳じゃが……流石に権限を与えるだけで元凶のワシが何もしないものあれなのでワシが愛読書とゲームを基礎にして趣味で創った魔法球とその管理にヴォーダをプレゼントしてみました」

いや、プレゼントしてみましたが元の世界が大混乱しているのは？

「今、元の世界が混乱してるんじゃないね？とか思つたじゃろ。じゃが心配無用！そのヴォーダはオリジナルを元にわしが創造したから混乱は起きどりんよ」

見る側の考え方を予測して録画するつてアンタはル〇ーシュですか！？

「今度はアンタは○ルーシュかつて思つたじやろ？残念でした。アニメを見て真似しただけじゃ……とまあ、部下のオーラが段々禍々しくなつて来たのでこの辺で終わりにする。最後にわしが言えた事ではないが一度めの人生噛みしめて生きるとええ。さらばじや！」

（再生終了）

「……なんか突っ込みどころ満載なビデオレターだな」

「それは今更だから言わない方が精神的にはいいぞ。それと……」

「どうした？」

首を傾げながらティエリアを見る。

「君は僕を知つてゐるみたいだが僕は君を知らない。自己紹介してくれないか？」

「そういやまだしてなかつたな。俺の名は奏志、鉄奏志だ。宜しくティエリア」

「ティエリア・アーデだ。此方こそ宜しく頼む。そしてこれが老化を抑えるネックレスだ」

自己紹介を終え老化防止のネックレスを受け取つたといひて奏志はある相談と確認をティエリアにした。

「そういうや蒂エリアに訊きたい事が幾つか有るんだが良いか？」

「時間が掛かるなら下の談話室に移動するか？」

「そうするわ。此処に着くまで神経張り詰めて無駄に疲れた」

「……理由を訊いても良いか？」

「キルモードのオートマトン三枚に下ろしてから他に罠がないか警戒してた」

横田で見るとティエリアは眼を見開いて驚愕の表情を浮かべていた。

「あれの設定変更は龍樹とスクナに一任していたがまさかいきなりキルモードに変更するとは……君はバグか？」

成る程、犯人はあいつ等か。まあ後でボコるとして……

「それにプラスしてチートな……魔術師からすれば俺つて幻想殺し^{イマジンブレイカー}並みかそれ以上の天敵だし」

「そう言えばそうだつたな……つと着いたぞ」

雑談をしているうちに談話室に到着した。扉を開け中に入りソファに腰掛ける。

「それで訊きたい事とは何だ？」

「まずこの別荘にはどんなエリアがある？」

「「」の城を含めて現時点で転送ポートを設置しているエリアの数は

大まかに分類して海や空、凍土などの一〇ヶ所だがそれで全てでは無い」

「どういう事?」

「一〇のエリアでも多いと思うんだが……」

何時のためにかテーブルに置いてあつた紅茶を飲む。

「エリアの探査には自律行動型の機体を使っているのだがそれでは侵入出来ない場所がある。試しに僕が遠隔操作で入ろうとしたら境界線を越えた瞬間に機体を粉々にされてしまった」

境界線を越えた瞬間に粉々って超重力で押し潰されでもしたか?

「そのエリアは俺が時間ある時にでも探索するとして次の質問なんだが」「

「何だ?」

「ティエリアも含めてだがどの時点までのデータが有る?」

「機体データは全種類、その他医療機器や戦艦、あとは探索済みエリアに生息する生物や狩りに必要な道具のデータなどだな」

「ティエリア、データがあるって事はそれ等を製造する事も可能って事だよな?」

「必要性が無かつたので封印してはいるがオリジナルの太陽炉を除いて製造可能だ」

あ～やつは太陽炉は木星でなけりや造れないか。でもちょっと待てよ？もしかしたらあれが動力源に使えるか、んでもってあれを使えば小型かも出来るかもしないな。よし造ろう！でも先に……

「それじゃティエリア、今後必要になるから一先ずは再生治療用機器の製造を最優先事項でお願い」

「了解だ……ところで48時間経たないと別荘からは出られないのだが奏志はどうやって過ごす？因みにこの城に食料の備蓄は全く無い。紅茶や珈琲のストックが少しある程度だ」

参ったな～。流石に丸一日飯抜きは流石にキツイ。何処かで食料を調達しないと……

「ティエリア、徒歩一日で往復可能な範囲で一番危険度が低いエリアって何処？」

「それならこのエリア3だな。温暖な気候と豊富な食料、原生生物の危険度も最高で捕獲レベル3程度だ」

「（城壁見た時から薄々感じてはいたがやつぱトリ）だつたか）そんじやそのエリアで決定。一日経つたら戻るから後の事よりしくね

」

そう言い残し奏志は開け放たれた窓からピョンと飛び降りた。それを見たティエリアは……

「幾ら降りて来たといえこ」」サビルの「百階に相当する高さなのだが……まあ彼なら大丈夫か

凄く冷静でした。

一方で飛び降りた奏志はといえば・・・・・

「うーん、勢いでつい飛び降りたけど着地どうしよ?」

上下逆さまの状態で胡坐を搔いて悩んでいた……つていうかそんな時間無えだろ!?

「考えてる時間無いし怪我すんのも嫌だし能力使って何とかしよ。幻想書庫、アクセス……」

身体を水平にして落下の勢いを殺しつつ能力発動のキーワードを紡ぐ。

「使用コード、四天王サニー」

能力発動と同時に奏志の髪が輝き出し、短く切り揃えられた黒髪から自身の身長ほどに長くなり色も青・ピンク・緑・白の4色に変化した。

「んでもって髪ネット^ア…」

触角を網目状に展開して落下の勢いを完全に相殺して城壁の上……丁度、龍樹とスクナのまん前に着地する。飯食いに行く前にこれやつとかないとな。

「それでお前、俺が何を言いたいか判つてゐるみな？」

『な、何の事じや？』

『思い当たるフシは無いのですが

あくまでシリカを切るか。

「キルモードのオートマトン」

『ギクッ…』

擬音が口から漏れてゐるよ…等。

「設定変更はお前らがティエリ亞から一任されてる

『ギク…』

「ティエリ亞の言葉から複数のモードがあるにも関わらずいきなり
キルモード[設定]

『…』

あひひ、黙つちひつたよ。

「O H A N A S I H サムスの…」

『…スリマセんでしたああ…』

おーおー、揃つて上座したよ。素直に謝ったからO H A N A

SHEは勘弁してやるか。

「宜しい、それじゃお仕置きに拳骨一回な」

『『優しくして下さいね』』

「うんそれ無理」

城壁から跳んで拳に氣を纏わせ更に触角を操りながら一体に接近する。そして一体の間を通過する瞬間に……

「右！羅漢適当に右パンチ！！。左！20万本髪パンチ！！」

ドゴン！…ズドン！…

適当に制裁を下しそのまま転送ポートに着地する。龍樹達は殴られた衝撃で頭を地面にめり込ませてリアル犬神家状態になっていた。

「あつ、入る時に壊した壁と陥没した地面直しといてね~」

そう言い残して秦志は城を後にした。この後、やつぱり心配になつて様子を見に来たティエリアがマンガやアニメでしか見れない様なタンコブを擦りながら涙目で修復作業をしている龍樹とスクナを見たとか見なかつたとか……

第3話 ギャグパート?はい、そして予感的中です（後書き）

奏志「作者よ、やっぱこれはカオス過ぎじゃね？」

作者「やっぱそつかな？けど折角ロストロギアがあるんだから使いたいんだよ。そして幾つかの作品で悩んだ末にヴェーダになつたんだよ」

奏志「そういう事ね。それで相談があるって言ってたが何なんだ？」

作者「実はさ、修行編つてつけてるけどこのまま修行編を続けるか魔法球から出た時点でキンクリして学園都市に行くかで迷つてんだ」

奏志「単刀直入に言うと早くもストック分が尽きたと」

作者「実はその通りで」

奏志「やっぱりか……因みにキンクリしたら修行編はどうなるんだ？」

作者「一応、本編中で回想シーンとして書く予定です」

奏志「なら良いんじゃねーの？でも俺らだけで勝手に決めんのはいただけねーから読者の皆様にアンケートする事を薦めるぞ」

作者「やっぱりそれが最良だよな。という訳でアンケートを探りたいと思います。内容は以下の通りです」

?「このまま修行編を続ける

?キンクリして原作突入

?作者の気分にお任せします

作者「この三つの中から選んで投票をお願いします。投票期限は1
2月7日までとさせて頂きます」

奏志「一応聞いておくがもし投票が一通も来なかつたらどうする積
もりなんだ?」

作者「それはその時に考えるよ。それよりもやる時間が無くな
つて來たぞ」

奏志「そんじや最後にあれやりますか。今度はへやすんじやねーぞ

作者「だから原稿書いて來た。はいこれ、せーの」

奏志・作者「「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入
り登録して下さった皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱
字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次
回お逢いしましょつ」「ひ

ティエリア「キンクリすると僕の出番は如何なるんだ？」

作者「ちゃんとあるから心配すんな」

主人公設定1（前書き）

それではどうぞ

主人公設定1

作者「さて奏志君、早速だが今回は君の現時点での情報の開示と能力の一部紹介をしようと思う」

奏志「別に構わないけどよお、ついウツカリでネタバレし過ぎんなよ？」

ティエリア「ネタバレし過ぎそつになつたらその時は僕が君を討つ」
作者「おー怖ッ！なら口を滑らさない様気をつけて始めるとしよう。先ずは奏志の基礎情報から」

名前：鉄くろがね 奏志そうし

年齢：10歳 身長：現在145cm 体重：現在50kg

血液型：A型 視力：5.0（10.0）

ステータス：テイルズ風 ランクはE～EXで表記。一般成人男性
はCランク、聖人で大体Sランク

腕力：B+（SS+） 体力：AA（???）

知力：AAA+ 精神：B～SS

敏捷：AAA（SS-） 器用：S+（SS）

氣量・SSS（時限EX、その後E）

作者「まつ、こんな所か」

奏志「括弧の中のランクはどういう意味何だ？」

ティ「氣量以外は氣による強化後のランクだ。氣量については今は話せない……が時間制限付きでのランクアップとその後のランクダウンで見当はつけやすいだろ?」

奏志「成る程な。にしても聖人でSランクってEXランクなんて居んのか？」

作者「それが居るんだよ。お前の爺さんの鉄陣内は上のステータスの知力と器用以外が全部EXなんだよ」

奏志「マジかよ! ? ってか何で知力と器用はEXじゃないんだ?」

作者「知力は単純にEX取るにはこの世の全ての事を知らなきゃいけないから、器用は小細工する時間が有るならその間にぶつ飛ばせ! って言う人だからだ」

奏志「あ~何か納得。因みにそれを踏まえた上で爺様のその二つのランクって?」

作者「……知力がSSSで器用がSSS」

奏志「……」

「…………」

作者「…………」

奏志「…………勝てる人間いんの？」

作者「…………さて次は能力関係だな」

奏志「スルーですか」

・混沌とした実在
カオティック・リアル

作者「これは一言で言つてしまえば全ての魔力や術式を中和してしまふ能力だ」

奏志「上条さんの幻想殺し^{イマジンブレイカ-}と似てないか？」

作者「確かに似ているが違う部分もある」

奏志「例えばどんな所だ？」

作者「先ず第一に能力の発現範囲だ。幻想殺しが右手限定なのに対して混沌とした実在は全身で能力を使用する事が出来る。第二に「そこから先は禁則事項です」…ティエリア、合成音声使ってそのセリフは正直キモイぞ」

「（ブチッ！）ハイパーべースト完全解放！！」

作者「えっ！何でセラヴィーに乗つたぎに、やあああああああ！」

！」

奏志「あら～～作者が見事コンガリと黒焦げになっちゃつてしまあ…思つても口にしちゃいけない事もあるだ～」「奏志も黒焦げになりたいのか？」イイエ、エンリョシマス」

ティ「懸命な判断だな。それでは作者が消し炭になつてしまつたので此処からは僕が司会進行をしよう」「

奏志「それは良いがこれ如何すんだ？」

ティ「次はこれだ」

奏志「こつちもスルーですか」

・幻想書庫
イマジンバンク

ティ「この能力の特徴～「それは俺に言わせてくれないかティエリア～…まあいいだろ～」

奏志「あんがとさん　この能力はプロローグで言つた様に自身の記憶している情報を具現化する能力だ。またその性質上、記憶している情報量によつて強さが変化するといった一面を持つている

ティ「だが奏志は完全記憶能力を貰つてゐるのだろう？」

奏志「だから記憶喪失にでもならない限り弱くなる事はまず無いと言つていいだろ～ね」

「ティ」「奏志、それはフラグではないのか」

作者「今回の雑談部分は本編とは関係無いから問題ない」

奏志「あつ復活した」

ティ「再生治療の理論的限界値を超えているだと…？」

作者「いじ都合主義バンザイ！」

ティ&奏志「「ウザッ！」「

作者「あんまそういう事言つてつと主人公でも遠慮なく出番減らすよ？それにティエリ亞にはレギュラー入り考えてたんだけどヤメよつかな～」

ティ&奏志「「スミマセンでしたあああああーーー！」」「おー

作者「よろしい。んじゃこれ以上はネタバレになりしそうだしそもそも主人公設定つて回だからそろそろ終わりにする？」

奏志「それもそうだな」

ティ「主人公設定と言いつつ半分近く雑談になつてた気がしないでもないのだが……」

作者「冒頭で能力の紹介は一部に限定してるから良いんだよ。それここまで喋り尽くすより本編で少しづつバラして行きたいしと」

ティ「確かに一理あるな」

作者「だら? それじゃ 今回は後書きせ休みだから此処でやるがー! セー
ーの」

作者&奏志&ティ「「「」」」の小説を読んで頂いている読者の皆様、
お気に入り登録して下さりました皆様、本当に有難う御座います。
誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それで
はまた次回お逢いしましょウ」「」

アンケート途中経過

?	1 票
?	2 票
?	0 票

作者「一先ず投票者数ゼロは回避出来た」

奏志「よかつたな」

主人公設定1（後書き）

休業日
|| || || ||

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8945y/>

とある世界の幻想書庫

2011年12月5日21時55分発行